

乳牛群の健康管理のための環境モニタリング

酪農ジャーナル 2010 年度臨時増刊号

及川 伸 監修

発行 酪農学園大学エクステンションセンター

2011年3月発行 B5版 175ページ 定価3,480円(税込)

「環境」は便利で、とらえどころのない言葉である。「環境」保護といえば、北海道の自然、森林あるいは野生動物が想起される。飼養環境といえば、動物を飼育する施設やその施設内での空気環境を思い出す。管理作業自体を「飼養環境」から想像したり、他の動物との社会的関係、あるいは管理者自身の存在を家畜にとっての「環境」と考えることもある。「環境」は具体的内容を示さなければ、さまざまな事柄が想起される言葉である。

本書は、表題にそうした「環境」を果敢に使い、乳牛群の健康管理のための手引き書となることを目指している。執筆者の1人として、その目的は成功していると断言する。監修者が述べているように、酪農場における生産性の低下や疾病は、ほとんどが人間が管理すべき「環境」の中のいくつかの要因が絡み合って起こる事象である。この絡み合った要因すべて記述的に網羅した冊子は読みにくく、本棚に放置されることが多い。

本書では、全体を成牛と哺育・育成牛に分け、「環境をチェックする」という視点に立って、(1)用語の解説、(2)評価の仕方、(3)疾病や生産性との関連、および(4)管理上の留意点として記述を統一することで、日常的に活用できるよう配慮している。この点が斬新であり、有用な冊子となっている理由である。

本書は、「見る」「触れる」「感じる」「確認する」といった現場(現実)を伴うことで、その価値が増える。最初に本書全体を眺めた印象は、「写真が多い」、「図が多い」であった。これだけ

ふんだんな写真や図表で構成されているので、目次で項目を選び、ページを開き、写真や図表から一読されることを薦める。技術向上のための指導書として使う場合には、現場に行って現物を見ながら説明したり、各自が見たり触ったりしてきた情報を持ち寄り、意見を述べ合うときの参考書とすることを薦める。自分自身、どんな写真をその項目に用いるか考えながら、酪農場の現実に対峙することが、「環境モニタリング」の実力向上、ひいては乳牛群の健康維持に貢献するだろう。惜しむらくは、動画、音響、におい、雰囲気掲載されないことである。現実の酪農場では、このすべてが大切な情報である。

本書は酪農場の乳牛群の健康管理の手引き書として、酪農場で働く人の関係についてページを割いていることも評価できる。牛達の健康は、職場での人間関係や組織体制にかかわる部分がとても大きいのが現実である。「不機嫌な職場」は「不健康な牛群」を生み、ますます職場は不機嫌になりがちである。

本書のもうひとつの楽しみ方は、掲載された多くの写真を眺めることである。いろいろな視点からチェックした牛達の姿が掲載されている。なかにはイヌも掲載されている。牛達の生活姿への配慮は、良質な牛乳を消費者に届けるための酪農家の努力である。乳牛の飼養管理に直接関わらなくとも、酪農家が牛達の健康維持のために、日常的に払う配慮を、本書を眺めることで知ることができる。

(酪農学園大学 教授 森田 茂)